

# YUTA KUROKI / 黒木裕太

Performance / Social Practice Artist

民俗儀礼の身体文化を手がかりに、  
人々の関わりの中から生まれるパフォーマンスと共創の場を探求する。



# Artist Statement

私は、民俗芸能や身体表現を手がかりに、人々が参加することで生成されるパフォーマンスと共創の場を探求しているアーティストである。

宮崎県椎葉村に伝わる杵尾神楽を継承している家系に生まれ、幼少期から地域儀礼の身体文化に触れて育った。神楽には、演じる者と観る者の境界がゆるやかに往還し、人々が身体を通して場に参画する構造が存在する。

私の実践は、このような儀礼に内在する人と人との関わり合う構造や公共性を参照しながら、現代社会において人々が身体を通して関係性を結び直す場を創出する試みである。即興や身体的な対話を通じて参加者同士の関係が生成され、そのプロセス自体がパフォーマンスとして立ち上がる状況を設計している。

学校、地域、福祉施設などでのプロジェクトでは、参加者それぞれの経験や感情、育ってきた土地や文化に根ざした身体表現からパフォーマンスを創造してきた。そこでは個人の内面にあるものが身体を通して表出され、人々が互いの違いを感覚的に受け取り合う状況が生まれる。

神楽をはじめとする儀礼文化の実践とリサーチ、そして国際的な共同制作の経験を通じて、身体表現が人と人、人と土地の関係を結び直す可能性を探求している。



2022年度 神社での撮影

## プロジェクト「の、まど」in 椎葉村 『しいば！おどりば！』（2022-2023）

主催：宮崎県立芸術劇場共催：椎葉村教育委員会

宮崎県立芸術劇場による地域創作プロジェクトの一環として、椎葉村にて実施。神楽や焼畑農業などの伝統文化が今も息づく山間地域において、小学生を対象に創作を行った。本プロジェクトでは、子どもたちの視点から見た「椎葉」を身体表現として立ち上げることを試みた。創作は、村の風景や名所を自由に身体で表現することから始まり、対話を重ねながらシーンを構成していった。

また、ソロパートでは「自分の好きなもの」を出発点とし、個人的な記憶や感覚を身体へと翻訳するプロセスから個々の振付を創作した。土地の記憶と個人の身体感覚が交差する場をつくるのが、本実践の出発点となった。

2022年は映像作品として発表、2023年は地域の祭りにて上演した。



Creation, 2022



Creation, 2022



2023年度 地元の祭りでの発表

椎葉での実践を通じて確立されたのは、「対話を通じて身体表現を生成する方法」である。参加者の語りやイメージを丁寧にすくい取り、それを動きへと変換するプロセスを重ねることで、作者が一方向的に振付を与えるのではなく、参加者と共に創作した。

重要なのは、完成度ではなく生成過程そのものに価値を置く点である。身体を通して地域を再発見する時間を共有することが、作品創作と同時にコミュニティを思い返す機会へとつながっていった。

この実践は、対話を通じて身体を立ち上げる方法の出発点となり、後の高千穂での実践へと発展していく。



Discussion, 2023



Creation, 2023





Art Workshop



Dance Workshop

## プロジェクト「の、まど」 in 高千穂町 『舞い、奏で、彩る、高千穂』（2023-2024）

主催：宮崎県立芸術劇場 共催：高千穂町教育委員会

椎葉で培った対話型創作を基盤に、高千穂町ではより多様な背景を持つ参加者と共に実践を展開した。福祉施設利用者、特別支援学校関係者、地域のダンススタジオなどが関わり、世代や立場を越えた共同制作の場を構築した。

創作は、参加者それぞれが「高千穂の好きなもの」を絵として描くことから始まる。共有されたイメージを対話しながら身体へと翻訳し、作品全体の構造を組み立てていった。ある参加者の描いたピラミッドのイメージから生まれた「箱」というモチーフは、高千穂に現存する観光鉄道のイメージへと繋がり、高千穂の自然や神話、暮らしを巡る象徴的な装置となった。



Rehearsal - Train Scene



本プロジェクトでは、造形作家をメンバーに迎え、舞台美術制作にも地域の高校生が参加するなど、身体表現を越えて空間創造へと実践を拡張した。創作のプロセスそのものを地域に開くことで、参加者が「観客」ではなく「共創者」として関わる構造を設計した。上演は単独公演として実施。参加者の個性を尊重しながら、高千穂の四季や風景、神話をモチーフに構成された。

本実践は、「できる／できない」という評価軸を超え、異なる身体や背景を持つ人々が同じ場を共有するための方法を探る試みとなった。

Video Documentation

Performance Digest



Workshop & Creation Process





## 「Rootedness and Beyond」 Festival Muria Raya #2 (2022)

インドネシアの伝統音楽と現代音楽を横断する音楽家  
Ki Ageng Qithmir (キ・アグン・キスミール) との協働プロジェクト。

本企画は、「土地に根差すとは何か」という問いを起点に、中部ジャワのマゲラン地方とスマラン地方ムリア山周辺の山村地域で展開された。五穀豊穡を祈願する芸術祭 Festival Lima Gunung および、コミュニティと伝統儀礼に根差した芸術祭 Festival Muria Raya に参加し、パフォーマンスとワークショップを実施した。

Festival Muria Raya では、田畑が広がる山の上、遠くに海を望む棚田に特設ステージが設けられ、約500名の観客を前にフィナーレ作品を上演した。また、ムリア山周辺に点在する自然礼拝所を巡らし、読経が響くなかで身体を置き、パフォーマンスを行った。

本プロジェクトでは、祭礼や伝統芸能教室への参加、村の一般家庭でのホームステイを通して、芸能のみならず生活文化そのものと向き合った。

その経験は、インドネシアの土地性を鏡として、日本や椎葉における儀礼や風習を再考する契機となった。差異と共通項のあいだに立ち上がる身体を探りながら、他者との関係性のなかで更新され続ける「Rootedness (根差すこと)」の在り方を創作として提示した。

本実践は、伝統を固定的な継承として扱うのではなく、環境・儀礼・共同体との相互作用のなかで生成される動的なプロセスとして再定義する試みであった。

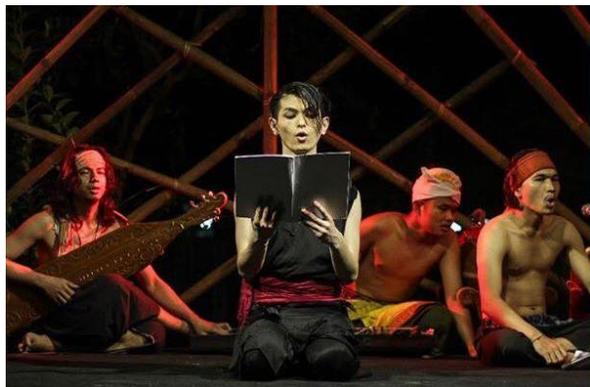


Video Documentation  
Performance film



# International Practice: Trails Across Contexts

2018年のインドネシア滞在を起点に、異文化環境における身体の在り方を探求してきた。共同制作、展示空間での実践、フェスティバル視察を通じて、創作と関係構築の両面から国際活動を展開している。



## 2018 Encounter ～異文化との直接的遭遇による国際実践の出発点～

### When the Differences Meet (Indonesia)

日本とインドネシアの古典音楽を軸とした共同制作プロジェクト。インドネシアに滞在し、両国のアーティストと対話を重ねながら創作を行い、3都市で公演を実施した。本企画を契機に、インドネシアのアーティストとの継続的な交流が始まった。



## 2024 Collaboration ～多文化環境による共同制作方法の深化～

### Festival Islam Keplauan (Netherlands)

オランダ・デン・ハーグで開催された芸術祭に出演。Ki Ageng Qithmirとの協働に加え、オランダを拠点に活動するインドネシア伝統舞踊団やガムラン演奏家と共同制作を行った。アムステルダムのガムランハウスでは、身体と内面の感覚に向き合うワークショップとパフォーマンスも実施した。



## 2024 Context Shift ～ダンスを展示文脈へ接続し、身体と空間の関係を再構築～

### Group Exhibition 「PAGI/SORE」 (Studio Kalahan, Indonesia)

インドネシアと日本の関係性を主題とするグループ展のクロージングセレモニーにてパフォーマンスを実施。展示作品との関係性から身体を立ち上げ、観客や他のアーティストと共に空間と表現を共有する祝祭的パフォーマンス構造を創出した。



## 2024 Network ～共同制作を支える回路としての国際的基盤の形成～

アーツカウンシル東京アートマネジメント人材等海外派遣プログラム Indonesia Dance FestivalおよびIndonesia Drama Reading Festivalを視察し、アーティストやキュレーターとの対話を通じて国際的ネットワークを構築。



## GaDo-GaDo presents Improvisation Performance Serie (2024-)

オランダでの「Festival Islam Keplauan」出演を契機に立ち上げた即興パフォーマンスシリーズ。オランダ在住のサクソ奏者・植川縁とのコラボレーションを軸に、開催地にゆかりのあるアーティストをゲストに迎え、音楽とダンスのセッションを展開している。

2024年に宮崎市・ハートリスニングホール、2025年に高千穂町・正念寺にて実施。

本シリーズは、アムステルダムのがムランハウスでのパフォーマンスにおいて、観客が空間に点在された楽器を自由に奏で、場と演奏を共有した経験に着想を得ている。また、宮崎県に伝わる桐尾神楽の「芝入れ」に見られる、観客が御小屋に入り踊りや鈴を通して神楽に参加する構造にも影響を受けた。

それぞれが思い思いに鳴らす音が音楽へと変わり、身体の動きが踊りへと変容する瞬間を、出演者と観客の境界を越えて共有する試みである。本実践は、神楽に内在する公共性と即興的關係生成を現代的文脈に再構築するプロジェクトである。

# Community-Based Practice

私の実践は、作品制作に限定されるものではなく、学校や地域施設における継続的な活動と地続きにある。そこでは「教える／教わる」という構造ではなく、対話を通して身体を立ち上げる方法そのものを探っている。教育現場や公共空間は、異なる身体や背景を持つ人々が共存するための構造を実験する場でもある。



## Inclusive Practice

文化庁・日本演出者協会「楽しくつながるプロジェクト」立川学園アウトリーチ（2023）では、聴覚障害のある高校生と手話を起点にパフォーマンス作品を共同制作した。音声言語に依存しない対話のなかで、身体のリズムや視線、間合いを共有しながら創作を進めた。そこでは、言語の違いは障壁ではなく、新たな表現と関係性を生み出す契機となった。



## Ritual & Museum Context

宮崎県総合博物館・民家園「椎葉の民家」にて開催された特別展「山の面・海の面～祈る化身のカタチ」（2024）では、神楽面と身体表現を組み合わせたワークショップ「MY 舞 MAIN」を実施した。展示物としての民俗資料を鑑賞対象に留めるのではなく、身体を通して再解釈することで、儀礼と現代の身体を接続する場を試みた。



## Improvisation & Public Participation

広島県安芸区民センターでの「動きと音のワークショップ&即興パフォーマンス」（2025）では、サクソ奏者・植川縁とともに、参加者が即興的に身体と音を交差させる構造を作り出した。演奏と踊りの役割を固定せず、参加者一人ひとりが音と動きを担うことで、場そのものが生成されていくプロセスを共有した。

## **Future Research**